

青森県における鬼の伝承についての再考

小山隆秀 (※)

Reconsidering the Oni Legends of Aomori Prefecture

OYAMA Takahide

キーワード；鬼、鬼神様、岩木山信仰、鳥居の鬼コ、水神、龍、法霊、ホウリョウ

はじめに

日本各地の鬼の伝説や伝承については、先学による多くの研究がある。本稿はそのなかでも、青森県内の事例を取り上げて分析したい。

青森県内の鬼に関わる民俗や信仰については、大湯卓二が、伝説や昔話、年中行事、津軽地方の霊山岩木山に関わる現在では採集が困難となった多くの貴重な事例を紹介して総合的に分析している⁽¹⁾。また福土壽一が、津軽地方各地の神社に奉納されている鳥居の鬼コの像の悉皆調査を基に、その信仰の背景について詳細な分析を行った。さらに各地の裸参りの行事を詳細に分析し、鬼神と元三大師、豆絞り、大相撲等との関連性も指摘した⁽²⁾。弘前大学が、青森県弘前市鬼沢集落の産土社であり、近世以来、鬼神を祀ってきた鬼神社の奉納物のうち、金属製品に関する調査と分析を行っており、それによれば、同社への鉄製農具類の奉納は19世紀以前に遡り、岩木山北麓から日本海側の鱒ヶ沢、岩木川下流域の住民からの奉納が多く、なかでも大型のものは地元ではなく遠隔地からの奉納物とみられ、奉納は岩木山赤倉の鬼神が赤倉と鬼沢を往来するとされる旧暦29日か鬼神社大祭日5月29日に行われていたとされている。鬼神社の前身である鬼神宮は、明和8・9年(1771～1772)年ころ、大きく整備された可能性があるという⁽³⁾。また、弘前大学民俗学研究室による鬼神社と鬼沢集落一帯において多角的な視点で行われた民俗調査の報告がある⁽⁴⁾。そして畠山篤が、丹念に集積した豊富なデータをもとに、岩木山信仰に関わる鬼の伝説や信仰、習俗について、全国各地の類例とも比較して詳細に分析した大著の中で、青森県内の鬼伝説は、単純型、山幸型、農耕型、鉄器型、カミサマ(民間宗教者)型、退治型、服属型、権威者守護型という7つのタイプに分類できるという⁽⁵⁾。そして入江英弥は、現代の津軽地方で伝承されている鬼に関わる昔話の構造を分析されている⁽⁶⁾。このほか櫻井敏太郎は、民俗調査の成果から、津軽地方の鬼信仰が、近世以来、稲作の非適地で、水の権利と関わる家筋で祀られていることを明らかにした⁽⁷⁾。

本稿は、それら先学達の優れた業績を踏まえたうえで、代表的な事例を再確認することで、在地の人々による鬼の伝承とイメージの地域性とその特質について再考し、今後の研究課題を明らかにすることをねらいとしたい。

1 定型的な鬼

鬼のイメージは、古代から中近世、近現代と長い時間をかけて、様々な伝説や語り物、文芸作品、絵巻、芸能等を通じて人口に膾炙するなかで、死や地獄に関わる存在、魔物や悪者等としての定型的なイメージが形成された。それは近世以降の青森県域に暮らしてきた人々のなかにも流布し定着している。近代以降の青森県内における鬼の事例を紹介する。

(事例1) 昔話「鬼のばくち」

中津軽郡西目屋村砂子瀬集落の話。爺さまが、穴におにぎり落してやったてな。鬼達がばくち打ちしていたので、鶏の鳴きまねしたって。鬼達がばくち打ちしたお金をそこにおいて行つたて。爺さまが持ち帰り、隣のお爺さんに教えたつてな。隣のお爺さんが欲張りして、穴からおにぎりを何とか落としたりしたてな。なんぼ落してやっても、落してやっても、ばくち止めないでいたって。そこで隣の爺様、「早く止める」と声かけたって。鬼にやつつけられて死んでしまったて⁽⁸⁾。

(事例2) 子供の遊び「鬼決め遊びの唄」

- ・南部地方には「鬼こぼぐり」という遊びがあった。鬼の役の子が他の者の体に手を触れることで「いった」と言い、鬼の仲間になる遊びがある。他にも「隠れおに」「繋ぎおに」等の遊び方がある。また北津軽郡鶴田町大巻集落には、鬼決め遊びの唄が伝承されていた⁽⁹⁾。
- ・西津軽郡旧岩崎村の遊び「いち、にの、さん、シュッ」(手の甲をたたかれるとオニになる)⁽¹⁰⁾。

(※) ※青森県立郷土館学芸課長

(事例3) 昔話「火車と鬼」

ある晩、八戸市大工町の十文字目の角の家の人が、夕涼みで外に出ていた。坂の上からゴロゴロと恐ろしい音がして、燃え上がる火の車の上に、一人の男が乗り、それを赤鬼、青鬼たちが押していった。しばらくすると、下の方から静かな鐘の音がして、さっき火の車に乗っていた男が、二、三人の和尚さんに取り巻かれて静かに歩いていった。その男は、知っていた人だったので、翌日、その男に尋ねると、驚き「実は、喧嘩した相手の家に火を付けよう行き、曹洞宗広沢寺の地蔵様の前でそのお姿を見たら反省の念が起こり、そのまま帰ってきた」という⁽¹¹⁾。

(事例4) 鬼婆のすみか

旧名川町下斗賀集落の地蔵畑から300mぐらい離れたところに、大きな蔦の木があった。昔、そこには、人が通れば、害を加えたり、者を盗ったり、人を殺したりする鬼婆がいた⁽¹²⁾。また、昔、奥入瀬川の石ヶ戸には、鬼神お松が隠れていた⁽¹³⁾。

(事例1)は、いわゆる全国各地でも伝承されてきた鼠浄土の話型であり、地下の異界の住民としての鬼が登場している。(事例2)では、子供達の遊びのトリックスターとしての鬼がイメージされている。(事例3)では、怒りの感情によって人間が一時、鬼たちの一味に加わるが、地蔵によって正気を取り戻して救われた、とする仏教説話のような世間話である。(事例4)は、人を襲う悪者としての鬼である。これらの話が、青森県内各地の人々の間で語られてきた理由には、民間にそれらの話が表現する鬼のイメージを受容し共感する素地があったからではないか。かつ(事例3)及び(事例4)は、語りの中に自分たちが住んでいる土地の実名が登場するため、それを聞いた人々は、鬼の存在をさらに実際に存在する身近な存在として認識したことであろう。

このような全国各地と共通する鬼のイメージは、青森県内の各祭礼の山車や郷土玩具のテーマやモチーフとしても活用されて、凶像や作り物として表現された。その可視化された鬼のイメージが、祭日のメインストリートで多くの人々の前を練り歩き、店先で商品として販売されて広く流布したため、人々は鬼の全国共通の定型的イメージをさらに共有し強化していったことだろう。



鬼(写真右側)を表現した青森ねぶた
(昭和38年8月5日佐々木直亮撮影、青森県立郷土館所蔵)



下川原人形「鬼盃」(左)と「青鬼」(右)
(太田久太郎作、青森県立郷土館所蔵)

そして、毎年祭日に多くの人々の前を練り歩いた山車人形の鬼は、定期的に公開することを自ら訴える強い存在として人々に認識されていたようだ。

(事例5) 八戸市の豪商西町では、江戸で、源為朝が琉球で鬼達と戦った伝説を再現した人形を作らせて、八戸三社大祭の山車にも出した。しかし、祭り期間の旧7月21日から六日間は、二百十日に近いからか、嵐になることが多く、家々が壊れたりしたので、お祭りに出さないことにした。すると毎年、祭礼当日になると、土蔵の中で大きな音がして、この鬼の人形達が暴れる音がするようになった。そのため、お祭りの日は、必ず店の前の座敷に出して飾ることにした⁽¹⁴⁾。

これらは全国的に定型化された鬼のイメージの影響下にある事例である。

2 地域の鬼

次に青森県内で伝承されてきた地域性のある事例を紹介する。まず鬼は、年中行事のなかで毎年特定の日に来訪する忌むべき存在であると考えられていたようであり、各家ではそれを防御する儀礼を行っていた。

(事例6) 2月の節分

- ・下北郡旧川内町畑集落。大豆を煎り、神棚に供えてから、窓や玄関を開けて「鬼は外、福は内」といいながら撒く。撒いた豆は拾って集めておき、悪い夢を見たときに年の数だけ豆を食べるといいという⁽¹⁵⁾。
- ・昔、南部地方では豆を蒔くとき、その年のアキの方(恵方)から左へ回りながら「鬼ア外、福ア内、其の目玉アぶつつぶせ」ととなえて三度繰り返す⁽¹⁶⁾。

(事例7) 腹から入る鬼

- ・節分の夜の「よなか見」の豆を味噌に入れておけば、鬼が腹から入ってもすぐに溶ける。また、女性が腰巻を外に干したまま夜になると、鬼が息を吹きかけてくる。それを知らずにあてると鬼が腹に入る。しかし火にあぶってあてると、鬼はたちまち、煙となって消えてしまう⁽¹⁷⁾。

(事例8) 明治40年(1907)頃の南部地方では、5月5日の節句に菖蒲を差さずに寝たり、正月15日の晩にヤカガシを立てておかないと鬼が来て「オーイ、オーイ」と外から呼んできたり、家の戸を揺らすものだとされていた⁽¹⁸⁾。

(事例6)のように、鬼は定期的に節分に祓う存在である一方で、(事例7)ではそのような鬼は人間の腹に侵入する存在としても考えられていたようだ。そして(事例8)は、年中行事のなかで定期的にやってくる存在としての鬼である。これについては、大湯卓二による小正月等における鬼カガシの行事についての研究がある。これは、1月15日の小正月、1月1日の大正月の日などに、一つ目小僧、厄神、オニがやってくるとされ、それらの魔物を防ぐため、家の門口に立てかけた棒に目籠(メカゴ)をかぶせると、その目の数の多さに魔物たちが恐れて逃げるものだという行事である。例えば青森県内では、下北郡東通村小田野沢集落において、毎年1月15の早朝に、家の戸口にコダシ(植物の蔓で編んだ籠)を棒にかけて立て、魔よけとした。また下北郡東通村野牛集落でも、1月14日の晩に門口の棒にコダシをかけて、玄関で灯明を炊いたという。このように目籠を立てる行事は他にも、東北地方南部、関東地方、東海地方において、2月8日や12月8日に一つ目小僧や妖怪が現れるとするコト八日や節分でもみられたという。他にも、それらの来訪する魔物が具体的な姿として表現される例が、下北郡風間浦村蛇浦集落や旧大畑町赤川集落等がかつて伝承されていた、小正月のナガメズリまたはチャボシの行事であり、小正月の夜に鬼面等を被ったものが家々を回る行事である⁽¹⁹⁾。



アケビ蔓で作られたコダシ (昭和54年に下北郡風間浦村易国間集落にて採集、青森県立郷土館所蔵)



ナガメズリの面

(1988年に風間浦村蛇浦集落にて青森県立郷土館撮影)



ナガメズリの行事

(1988年に風間浦村蛇浦集落にて再現、青森県立郷土館撮影)

またその一方で、鬼は巨大な存在であるというイメージからか、季節の代わり目にあたる年中行事でこしらえる特別な大型の食物に鬼の名を冠した。さらに鬼の力を取り込んで魔除けの作法とする行事もあった。

(事例9) 鬼の舌等

- ・下北地方。三月三日、アワや餅米で菱型の餅「鬼の舌」を作った⁽²⁰⁾。
- ・下北郡東通村大利集落。アズキ餡を入れた大きな丸餅をつくり、十文字の四つ切りにしたものを「鬼の舌」といい、お釈迦様の誕生日を祝うシガツヨウカ(四月八日)に作った⁽²¹⁾。
- ・下北地方。オニユリを畑に植えておき、春か秋に掘り、普段は食わずに、不幸事や祝い事があれば、茶碗蒸しにオニユリの根を入れた⁽²²⁾。

(事例10) 五月五日の鬼のハナ・鬼の角巻

- ・下北郡旧脇野沢村九艘泊集落。五月五日端午の節句の前日に、オニのハナ(シンコ餅)と菖蒲、ヨモギを寺にもっていく⁽²³⁾。
- ・下北郡旧川内町上倉平。五月五日の節供に、家族が全員家に入ってから、入り口と神棚にショウブを張り、戸窓にショウブとヨモギを差した。そして「鬼の角巻く」といって笹餅を作る⁽²⁴⁾。

(事例11) 6月1日の鬼の骨

- ・田子町細野集落。6月1日に、鬼の骨といって、正月にワラに包んで縁側に干しておいた餅を焼いて食べた。こんがりとして美味しかった。「鬼に骨を抜かれない」といって食べた。また旧福地村法師岡集落でも6月1日に正月の餅を干したものを食べた⁽²⁵⁾。
- ・旧名川町剣吉集落。6月1日に、鬼のアバラカミといって、魚の骨などのアラをワラツトに入れておいたものを煮て食べると夏負けせず、体が丈夫になるという⁽²⁶⁾。

なお、夏堀謹二郎も、6月1日は鬼の餅を、3月3日は鬼の角に模したツノモチを、4月8日は鬼の耳だとするアオモチを、5月5日は鬼の舌としてマキモチを食べる習俗が下北地方にあったと報告している。これらの習俗について大湯卓司は、焼畑儀礼に関わる鬼の神性の関連性を指摘した⁽²⁷⁾。

(事例12) 夜泣きの鬼

- ・青森市横内集落。赤ん坊が夜泣きするときは、赤ん坊の手のひらに「鬼」という文字を指で書いてやると治るといった⁽²⁸⁾。

鬼は死と関わる存在でもあった。各寺では毎年定まった日に地獄絵をかけて絵解きをする行事があった。鱈ヶ沢町の曹洞宗広沢寺にも嘉永2年(1849)の十王図などがあり、それらの絵画のなかで鬼達は地獄の獄卒としての姿が描かれていることが多い⁽²⁹⁾。さらに鬼は葬送儀礼とも関わる存在としてイメージされていたようだ。

(事例13) 葬式の道具としてのオニ(鬼)

- ・つがる市牛潟集落。五つの龍の形の板に色を塗り、ひげをつけたものをオニ・五龍と呼ぶ⁽³⁰⁾。
- ・東津軽郡今別町奥平部集落。葬列の先頭はオニで、提灯が続いた⁽³¹⁾。
- ・下北郡旧川内町宿野部集落。オニやリュウなどは、昭和初期まで使った⁽³²⁾。
- ・十和田市下切田集落及び板ノ沢集落。オニは、寺で保管しており、使用後は返す⁽³³⁾。
- ・下北郡旧川内町銀杏木集落。死者を野焼き(火葬)した跡に、サンキを立て、鎌の柄を外して目釘に紐を通して下げた。死者が鬼に追われたらタマクラに隠れるためだという⁽³⁴⁾。
- ・下北郡旧脇野沢村小沢集落。死者を埋葬した後、サンキを立てて鎌を下げ、七日間、線香、ロウソク、刀を持って墓参りする。墓には鬼が来ているので、刀でサンキを叩いたりして、「来たぞー」と自分たちが来たことを知らせる⁽³⁵⁾。

このように葬列の先頭で、板に鬼の絵を書いて棒に付けたオニと呼ばれる祭具を持って歩く習俗が青森県内各地にあった。そして埋葬された後に死者の魂は、鬼に追われたり、その来訪を受けると信じられており、それを避けるための呪術も各地で伝承されてきた。他にも南部地方の上北郡旧日間林村花松集落では、昔、葬式のときに、メラシ(娘)を棺に入れていたら、突然、竜巻がやってきて鬼に死体がさらわれて消えたという語りもある⁽³⁶⁾。

3 山と鬼

そして鬼には、大地の成立に関わって痕跡を残したという伝説上の巨人としてのイメージもあった。

(事例 14) 大泊の鬼

東津軽郡今別町大泊集落は、かつて鬼泊という地名であったとされる。岩の洞窟に鬼が棲み、海上を行き来する人々を困らせたり、畑を荒らしていたが、源義経に退治されたという伝説がある。現在も海岸には、鬼の洞窟、鬼が潜ったとする「鬼の穴」や「鬼の足跡」などの地形が残っている。現代では、その伝説にちなんで国道 280 号線沿いに、鬼をモチーフとした公衆トイレが設けられており、そのなかに観光客向けに鬼の伝説を紹介する掲示板も設置されている。



鬼が潜ったところ



鬼の穴



鬼の足跡



鬼をモチーフとした現代の公式トイレ



公式トイレに掲示された鬼の伝説の紹介文
(いずれも今別町大泊集落にて 2021 年 6 月 20 日に筆者撮影)

同様の伝説は県内各地にもある。例えば五所川原市長橋集落には、昔から水も溜まらず、木も生えないところがあり「鬼の足跡」と言われた。これは昔、岩木山の頂上に腰かけた鬼が片足をついたときにできたという⁽³⁷⁾。

他にも鬼は、嵐や大風などの気象と深く関わる存在として考えられていた。

(事例 15) 嵐と鬼

- ・中野村(現八戸市南郷区)は、後ろの岳(ダケ)の鬼が、前の岳(階上岳)へと通行する道筋なので、毎年、鬼が通るたびに嵐となり、作物が荒らされて百姓が困っていた。そこで名僧智識に、鬼が通らないようにしてくれと依頼した。すると僧侶は、百姓達に石を集めさせて、それに一文字ずつ経文を書いて、後ろの高地に埋めて塚を建てさせた。その場所は今でも「持仏塚」と呼ばれる。鬼が通らなくなり、作物も嵐の被害が無くなった⁽³⁸⁾。
- ・南部地方で大風が二日も三日も吹き続けると、階上や八戸、田子、二戸では、「魔物」または「鬼っ子」「鬼の子」が生まれたのだという⁽³⁹⁾。



(参考) 石に経文を墨書した経石 (1971年に十和田市滝沢館の曹洞宗法性寺にて採集、青森県立郷土館所蔵)

前述の(事例5)でも、毎年鬼の人形を出す時期が二百十日にあたり、嵐になりやすい時期であったとしており、(事例15)と共通する鬼のイメージが考えられよう。

さらに鬼たちは、山中の異人としてのイメージがあった。県内各地の山々のなかには、鬼の住み家の庭としての「鬼の土俵」「鬼のツボ」などと呼ばれて、山中で草木が生えないところ、鬼達が相撲をとる等の怪異が発生する不思議な場所があるとされた。そのような場所は、岩木山赤倉、五所川原市源八森・五本松、白神山地青鹿岳など津軽地方各地に存在したという⁽⁴⁰⁾。実際に岩木山赤倉は20世紀前半になっても、一般の市民にとっては「神秘境」「神秘の幽谷」という表現で記載される空間であり、探検隊を結成するほどの未知の場所として考えられていた⁽⁴¹⁾。同じく山中に鬼の異界があるという観念は南部地方にもあった。例えば上北地方の昔話で、お爺さんが、ダケ山にワラビ取りに行くと、メラシ(娘)が「我(わ)、鬼にさらわれてきた。門のところ人間が行けば、花咲く花が植えてあるので帰れ。もう少しで鬼が帰るので、早く帰れ」と言ったという話が伝承されていた⁽⁴²⁾。



岩木山赤倉の登山道にある「鬼の土俵」とその空間に建立されている鬼神様などの神仏像 (2021年6月20日、筆者撮影)

また、鱈ヶ沢町種里集落で代々マタギをしてきた家筋には、昔、鬼が水田作業を手伝ってくれた話が伝わり、家のなかの神棚に鬼神の小さな祠を祀っている⁽⁴³⁾。その家が伝える近代にあった実際の話として、同集落周辺の山中のある場所に、顔かたちが異なり通じない言葉を話す集団が住み付いたことがあったという。その集団は、ときどき山の幸を携えて麓に降りてきて、里の産物と交換して暮らしていたが、あるとき忽然と姿を消したという⁽⁴⁴⁾。山中の鬼の異界は、民間では近代まで現実の世界として意識されていたのである。

そして、そのような山中の異人や鬼のなかには、古くからの土地神のような存在で大きな力を持つ鬼がおり、それらの一部は遠い昔に豪族や宗教者たちによって調伏されたという伝説も少なくない。

例えば、平川市の猿賀神社では、毎年5月3日、諸難退散祈願の神事として、地面に立てた鬼を描いた杉板を、神職が弓で二回射て、太刀で割る鬼面奉射行事が行われている。この行事は、古代に坂上田村麿が、猿賀の神の助力を得て、在地の鬼である大富丸(おおたけまる)の首を打ち取った伝説に由来するという。近世には、正月11日に行う行事であり、桃の弓矢で、大きな鬼面を射抜く儀礼だったという⁽⁴⁵⁾。



平川市の猿賀神社における鬼面奉射行事（2009年5月3日、筆者撮影）

また岩木山にも様々な鬼が住んでいたとされる。伝説によれば、遠い昔、観音堂が、岩木山麓の十腰内にあったが、神のお告げで百沢の地へ移転した⁽⁴⁶⁾。その際に道案内役をした太田家が、鬼のすみかであるヤンサ森を攻めて、鬼の首を斬り、その証拠として鬼のアゴ(またはヘソ)と太刀を授かり、家宝にした。その後、太田家は、百沢に土地を与えられて永代寺役人となった。現在は岩木山神社の隣に「温泉旅館山陽」を営み、先祖が授かった鬼のアゴを屋内の神棚で祀っている。

その岩木山神社にも鬼に関わる資料が残る。鬼の石櫃である。伝説によれば、遠い昔、岩木山の悪鬼高丸を退治して岩屋を探すと、若く美しい山姫がいた。助けを乞うので、もう人間に悪さはしないと証文を書かせて、岩屋に住ませた。その証文を石の櫃に入れて納めたという。また別の伝説では、遠い昔、岩木山の鬼神退治のとき、九十歳の鬼女が降伏してきたので、山神の家来になって山を守るように、証文と手形をとって赤倉山に住ませたという。それは百澤寺の宝物となったが、証文を収めた箱を開くと、風雨が起るから、石櫃に入れて土中に埋めたとされる。18世紀に百澤寺を再建したとき、下居宮の元宮から石櫃が出土したため、再び埋めたが、幕末の地ならしで再度出土したという。畠山篤は、この伝説は、百澤寺だけのものではなく、岩手県和賀郡更木村集落の大竹山にも同じ話型があることを指摘している⁽⁴⁷⁾。



鬼のアゴ(またはヘソ)を封じ込めたという木箱
(温泉旅館山陽(弘前市)蔵)



鬼の石櫃(岩木山神社(弘前市)蔵)

一方で岩木山には調伏された鬼ばかりではなく、人間に助力する鬼もいたとされる。例えば、伝説によれば岩木山には、古来から卍(曼)字、錫杖という二人の鬼が住んでおり、坂上田村麻呂、津軽為信等の英雄や豪族たちはこの鬼達の助勢が無いと津軽を平定できなかったという。そして近世には、岩木山信仰を統括していた真言宗百澤寺住職がそれらの赤倉の鬼一族を従えてコントロールできることを弘前藩主に対して示していたという⁽⁴⁸⁾。

製鉄技術や土木工事等で人間に助勢する鬼達もいた。弘前市十腰内の鬼神太夫伝説がある。それによれば、昔、旅の若者が、この土地の刀工の娘に求婚した。刀工は断るために難題を出し、一晩で十腰の太刀を作れとした。しかし若者は鬼(または大蛇)だったため、火を吐き十腰の刀を作ってしまった。そこで刀工はこっそり一腰の刀を隠した。よって残った九腰しか確認できなかったために、旅の若者は婿になることを断念した。そして土地の名前が「十腰無い(十腰内)」となったという。現存する鬼が鍛えた刀の茎には窪みがあり、それは鬼が握った指の跡だとされる⁽⁴⁹⁾。



鬼が鍛えたと伝えられる太刀「鬼神丸」巖鬼山神社（弘前市十腰内）

また、岩木山麓の弘前市鬼沢集落には、鬼を神として祀った産土社である鬼神社がある。伝説によれば、弥十郎という農民が岩木山赤倉で大人（鬼）と遭遇して仲良くなる。鬼は、田畑の開拓や用水路の工事を助けてくれた。しかしあるとき鬼は姿を消す。弥十郎は、鬼の大きな鉄鍬と箆を御神体として、鬼神社を建立したというものである⁽⁵⁰⁾。



大型の鉄器を付けた奉納額を飾っている鬼神社（弘前市鬼沢、2006年、筆者撮影）

同様に山中の異人のなかには、神格化された「鬼神」として信仰の対象となる鬼たちもいた。代表的なのが岩木山赤倉の鬼神様である。赤倉の地は、近世以来、民間宗教者の霊場、修行場であり、鬼神から超能力を得たという人物を輩出してきた。例えば19世紀前半の弘前城下の豪商竹内金兵衛直正、幕末から明治にかけて活躍した種市の永助様、明治後期に名を馳せた石工石岡浅次郎らである⁽⁵¹⁾。

また、この赤倉の地における鬼伝説とつながる縁起を持ち、赤倉大権現を本尊とする曹洞宗赤倉山宝泉院がある。同寺は赤倉の地から、中畑村、鬼沢村を経て、弘前城下へ移転して曹洞宗三十三か寺の一寺となったという。同寺の開山伝説の背景には、中世末期から近世初期の岩木山東山麓において、曹洞宗大源派が、その地域の民間信仰と関わりながら布教活動を展開していたことが推測されるという⁽⁵²⁾。



岩木山赤倉の修行場（2021年6月20日、筆者撮影）

4 まとめにかえて 鬼研究の課題

これまでの事例考察を踏まえて、今後の研究課題を幾つか提示したい。

まずは鬼のタイプ分けの問題である。畠山篤の研究によれば、青森県内の鬼伝説は、単純型、山幸型、農耕型、鉄器型、カミサマ（民間宗教者）型、退治型、服属型、権威者守護型という7つのタイプに分類できることは紹介した⁽⁵³⁾。本稿では、さらに青森県内の人生儀礼や年中行事のデータも紹介したが、それらも加味すると、鬼にはさらに定期的に来訪する魔物及び悪疫、死者に関わる魔物だという認識も民間には広く普及していたのではないかと推測される。

さらにそのように定期的に来訪する魔物及び悪疫としての鬼を考えるうえで、参考となるのが、津軽地方各地の神社の鳥居に奉納されている鳥居の鬼コとよばれる像である。鳥居の鬼コとは、主に津軽平野を南北に流れる水源であり、かつては舟運ルートでもあった岩木川沿いにある各集落の神社の鳥居の額束等に貼り付けられている鬼の像であり、現在まで約40体以上の事例が確認されている。その役割について一般には「水害が多かった岩木川などの大きな川の流域の神社に多く、災い（天災や疫病）が集落に入り込まないように守り神の役目を担ってきました」とされている⁽⁵⁴⁾。

しかし、実際に調査してみればその多くは、製作者や製作目的、制作年代等が未だ明らかになっていない。そのなかでも有名であり、具体的な年代を表明しているのが、弘前市撫牛子集落にある撫牛子八幡宮の鳥居に掲げられている鬼コである。言い伝えによれば、最初の鳥居の鬼コは、甲冑師高山玄南作の木彫だったが、明治26年（1893）の大火で焼失したため、大正8年（1919）に石工櫻庭音吉が鳥居とともに再制作したものが現在のものだという。悪霊を防ぐ魔除けのために集落の氏子たちが掲げたという伝承があるようだ。

これらの津軽地方の鳥居の鬼コの機能について、大湯卓二は、旧金木町嘉瀬の稻荷神社の鳥居の鬼コなどのように、悪霊、疫病などを防ぐ魔除けとしての意味がある事例が津軽地方各地に幾つかあると指摘した、さらに鳥居の鬼コがある白山姫神社を持つ旧岩木町鳥井野集落では、悪疫が発生すると、各家でカボチャで鬼面をこしらえて門口に下げ魔除け封じとした習俗があることとの関連性を指摘したうえで、神社の鳥居の額束の別名としての鬼板が鬼の像へと変化したものが、現在の鳥居の鬼コとなったのではないかと推測した⁽⁵⁵⁾。



鳥居の額束に掲げられた鳥居の鬼コ
(金木川倉三柱神社、2006年、筆者撮影)



鳥居の鬼コ（弘前市鳥井野 白山姫神社、2006年、筆者撮影）

同様に、神社の鳥居と人形が集落に侵入してくる存在を封じる機能を持つ、という伝承に注目したい、それは南部地方にもあった。例えば、笹子集落（館村、現八戸市か）の村の下り口の野原のなかに、ぼつんと赤い鳥居が建っていたという。それは昔、西の岳からときどき鬼が来て、人をさらい、物を奪ったので、「ここに神がいる」ということを表すために赤い鳥居と建てたものであり、それから鬼はこなくなったという。しかしそれでも安心できないから、兜をかぶり刀を佩いたワラ人形を作って鳥居の側に立てた⁽⁵⁶⁾。このように鳥居の鬼コは、これまででも言われてきたように、集落を魔や悪疫から防御する習俗のひとつとして考えることが妥当であるといえよう。しかしやはり製作年代については、近世期まで遡る事例があまり確認されていないことから、近代以降、一時的に津軽各地で鳥居の鬼コの奉納のブームが発生した結果成立した事例であることも推測できよう。福士壽一も調査した鳥居の鬼コの過半数の由来が近代成立の伝承であり、その奉納には近代に赤倉に連なる宗教者達が関与していたであろうことを推測している。さらに入江英弥も鳥居の鬼コが明治期以降に岩木川流域で急激に広まった可能性を指摘している⁽⁵⁷⁾。さらに現代の鳥居の鬼コが、地域の文化資源や観光資源として再注目されて、様々な視座からメディアや媒体を通じて取り上げられる例が増えていることから、今後そのなかから新しい鬼の機能や語りも発生してくる可能性もあろう。今後さらなる事例の収集と分析が必要である。

もうひとつは、鬼の神格についてである。前掲の（事例13）のように、昭和期までの津軽地方や下北地方の村々において、葬列の先頭に掲げられる祭具がオニ（鬼）または龍だとしているように、青森県内の人々の一部で、鬼と龍が混同されたり、同種の存在のように語られる例が複数ある。その理由について考えたい。

(事例 16)

- ・弘前市鬼沢集落在住の昭和 20 年(1945)生まれの男性によれば、十腰内の地名の由来譚に登場する存在は、鬼または大蛇であるという⁽⁵⁸⁾。
- ・鬼沢集落在住の昭和 26 年(1951)生まれの男性が、氏子総代の先輩から聞いた話として「鬼の土俵の向かいの森に、龍が降りたという伝説」があるという。また同集落在住の昭和 23 年(1948)生まれの男性によると、鬼神社境内にある池は、かつて龍が泳いだという伝説のある池である。そのためその池のそばに龍神様が祀ってあるという⁽⁵⁹⁾。

(事例 16)は近現代の伝承であるが、同様のことは近世の絵画史料においても事例がある。例えば曹洞宗赤倉山宝泉院所蔵の「赤倉山大権現御出現の御姿軸」の絵画の上方には、中央に「赤倉山祖神 本尊赤倉大権現」とあり、少し右下に「卍字大鬼神」という文字があり、さらに反対側の少し左下には「錫杖大龍神」という神名が記されている。前述したように伝説では、岩木山に古来から棲む卍字と錫杖は、二匹の鬼とされることが多く、坂本吉加はこの二匹の鬼について、「山立根元記」系統の狩獵伝承や高野山系統の山岳密教との関連性を指摘していた⁽⁶⁰⁾。しかし宝泉院の掛け軸では、片方が鬼神であり、もう片方が龍神として表記されていることに注目したい。



曹洞宗赤倉山宝泉院（弘前市西茂森町）所蔵の「赤倉山大権現御出現の御姿軸」（19世紀末、外崎鶴幼筆）

近世の事例がもう一例ある。前述の鬼神社は、延宝 8 年(1680)の記録によると、もともと寛文 2 年(1662)に集落の氏子達が新規で「寶冷権現之宮」の名称で建立したとする。その後、貞享 4 年(1687)の陸奥國津軽郡検地水帳以降では、「鬼神社」「鬼子母神社」「鬼子母神宮」「鬼神宮」等という名称に変わり、明治 9 年(1876)以降、「鬼神神社」と記録され、明治 25 年(1892)には現在の「鬼神社」として表記されている⁽⁶¹⁾。すなわち、設立当初「寶冷」（ホウリョウまたはホウレイ）という他の各地にも複数存在する神名であったものを、弘前藩の土地制度を固め始める 25 年後には、土地固有の伝説を反映した独自の名称である「鬼神宮」へ変更して正式登録しているのである。

小池淳一の研究によれば、この「ホウリョウ」の呼び名を持つ神社は、法霊、法量、宝龍、法呂などと様々な表記をされて、現代では青森県南部地方に多く残っているが、鬼神社がある津軽地方でも、青森市孫内の淡島神社が明治以前は宝龍大権現と称していたり、北津軽郡板柳町表町海童神社も近世までは宝量宮・宝量権現という名前であったという。そしてこれらのホウリョウ神は、中世期まで遡る可能性がある神で、靈威が著しく、清水に宿る蛇体の二つの水神でもあり、かつて熊野信仰や修験が関わっていたが、その信仰の多くは近世期には人々の間で忘れられていた神ではないかという⁽⁶²⁾。

この水神としてのホウリョウ神の神格は、近世から近現代にかけての津軽地方の鬼の神格とも重なる。例えば畠山篤は、鬼神社の鬼伝説が、外部には水利権を主張し、内部には共同体の維持を図ろうとする水利伝承であるとしていること、鬼が棲む岩木山赤倉が、近世期において盛んに雨乞いが行われてきた場所であること、旧平賀町の平田森集落にある歯もりで鬼の歯を掘り出して雨乞いをする習俗があったこと、津軽地方の鬼信仰が水の権利と関わる家筋で祀られていること等から、津軽地方の鬼が水と深く関わりと指摘していたことと関連性がないだろうか⁽⁶³⁾。すなわち津軽地方において、鬼が龍と混同されたり言い換えられている事例は、鬼は龍と同様に水に関わる神性も帯びた存在であると、近世から近代の同地方の人々がイメージしてきた証左ではないだろうか。そして津軽地方の鬼のイメー

ジの前身には、鬼神社が17世紀末に最初は「寶冷権現之宮」の名称で建立されているように、中近世まで津軽地方や南部地方の両方に共通して分布していた法霊信仰の影響もあったのではないだろうか。例えば、法霊神が二つの蛇体の神であるとされてきたことと、岩木山赤倉の鬼神も二人であるとされてきたことの共通点もある。さらに20世紀初頭の実話として、狐に憑かれた車夫が、八戸市八幡町の法霊神社の鳥居に飛び乗って座ったり腰かけたことがあるという世間話があるが⁽⁶⁴⁾、異界の存在に動かされた車夫の行動は、近代に民間宗教者達の指示で奉納された津軽地方の鳥居の鬼コ⁽⁶⁴⁾の姿とも重なる要素があろう。このように両者の信仰について今後さらなる分析を進めていきたい。

(引用文献)

- (1) 大湯卓二 1989 「青森の鬼」(佐藤秀昭『東北の鬼』岩手出版)
- (2) 福士壽一 2006 「津軽の鳥居の鬼コ⁽⁶⁴⁾の背景 -- とくに役行者(観音)と毘沙門天(鬼)との関連において--」(弘前学院大学地域総合文化研究所編『地域学 四巻一津軽キリシタン史・陸羯南一』弘前学院大学)、福士壽一 2008 「鬼・大人・裸参り一角(鉢巻き)・相撲との関連--」(『青森県の民俗 第8号』青森県民俗の会)
- (3) 関根達人編 2013 『弘前市鬼沢鬼神社奉納品の調査報告』弘前大学人文学部文化財論講座
- (4) 山田巖子編 2014 『弘前大学人文学文化財論講座調査報告書Ⅱ 弘前市鬼沢 鬼神社の信仰と民俗』弘前大学人文学部文化財論講座、山田巖子監修・弘前大学人文学部民俗学実習履修学生編 2016 『津軽地方の鬼信仰と民俗--弘前市鬼沢・十腰内、西津軽郡鱈ヶ沢町建石・湯舟一』弘前大学人文学部民俗学研究室
- (5) 畠山篤 2016 『岩木山の神と鬼』北方新社
- (6) 入江英弥 2016 「昔話からみた津軽の鬼」(文学部紀要編集委員会編『弘前学院大学文学部紀要 52号』弘前学院大学文学部)
- (7) 櫻井欽太郎 2017 「青森県津軽地方の鬼信仰再考--西津軽郡鱈ヶ沢町を中心に--」(『東北民俗 第51巻』東北民俗の会)。
- (8) 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編 2008 『青森県史叢書 平成19年度 岩木川流域の民俗』青森県、p181
- (9) 奥南新報「昭和7年(1932)2月19日付記事(青森県環境生活部県史編さん室編集 1998 『青森県史叢書 平成9年度 奥南新報「村の話」集成 上』青森県、p143~144、前掲書『岩木川流域の民俗』p250
- (10) 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ編 2010 『青森県史叢書 平成21年度 西浜と外ヶ浜の民俗』青森県、p255
- (11) 「奥南新報」昭和9年(1934)1月25日付記事(前掲書『村の話 上』p244)
- (12) 青森県環境生活部県史編さん室編 1999 『青森県史叢書 平成10年度 馬淵川流域の民俗』青森県、p241
- (13) 「奥南新報」昭和12年(1937)6月4日付記事(青森県環境生活部県史編さん室編集 1998 『青森県史叢書 平成9年度 奥南新報「村の話」集成 下』青森県、p107)
- (14) 「奥南新報」昭和10年(1935)4月17日付記事(前掲書『村の話 下』p15~16。なお同様の伝承として、2026年現在から二世代前までの津軽地方の五所川原市では、3月3日に雛人形を箱から出さないと、雛人形が箱の中で騒ぐものだという語り商家であったという(2026年、五所川原市にて外崎源人氏に筆者聞き取り)
- (15) 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ編 2003 『青森県史叢書 平成15年度 下北半島西通りの民俗』青森県、p138
- (16) 「奥南新報」昭和9年(1934)3月10日付記事(前掲書『村の話 上』p251)
- (17) 「奥南新報」昭和10年(1935)2月22日付記事(前掲書『村の話 下』p9)
- (18) 「奥南新報」昭和9年(1934)4月7日付記事(前掲書『村の話 上』p253)
- (19) 大湯前掲書 p38~48
- (20) 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室編 2002 『青森県史叢書 平成14年度 下北半島北通りの民俗』青森県、p91
- (21) 青森県史編さん民俗部会編 2007 『青森県史 民俗編 資料 下北』青森県、p129
- (22) 前掲書『青森県史 下北』p114
- (23) 前掲書『青森県史 下北』p267
- (24) 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ編 2003 『青森県史叢書 平成15年度 下北半島西通りの民俗』青森県、p138
- (25) 前掲書『馬淵川流域の民俗』p169、青森県史編さん民俗部会編 2001 『青森県史 民俗編 資料 南部』青森県、p297
- (26) 前掲書『青森県史 南部』p298
- (27) 夏堀謹二郎「鬼の餅--北ノ郡栗山里談(九)--」(前掲書『村の話 下』p156)、大湯前掲書 p55~56
- (28) 青森県史編さん民俗部会編 2014 『青森県史 民俗編 資料 南部』青森県、p230
- (29) 青森県内の各寺院における地獄の絵解きの研究に、山田巖子 2011 「青森県における仏教唱導と女性--地獄絵の開帳をめぐる--」(林雅彦・小池淳一編『人間文化叢書 ユーラシアと日本--交流と表象-- 唱導文化の比較研究』岩田書院)がある。青森県立郷土館編 2009 『妖怪展 神・もののけ・祈り』青森県、p46
- (30) 前掲書『岩木川流域の民俗』p121
- (31) 前掲書『西浜と外ヶ浜の民俗』p113

- (32) 前掲書『青森県史 下北』p246、『下北半島西通りの民俗』p125
- (33) 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さん室編 2001『青森県史叢書 平成13年度 小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』青森県、p108
- (34) 前掲書『下北半島西通りの民俗』p127～128
- (35) 前掲書『下北半島西通りの民俗』p128～129
- (36) 前掲書『小川原湖周辺と三本木原台地』p188
- (37) 森山泰太郎 1966『陸奥の伝説』第一法規出版株式会社、p162
- (38) 「奥南新報」昭和5年(1930)5月25日付記事(前掲書『村の話 上』p59～60)
- (39) 「奥南新報」昭和6年(1931)4月16日付記事(前掲書『村の話 上』p102)
- (40) 畠山篤前掲書p103～105
- (41) 「弘前新聞」昭和4年(1929)8月11日付け記事「愈々踏破される赤倉の神秘境 弘前山岳会員約八十名 昨日勇ましく壮途に上る」
- (42) 前掲書『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』p188
- (43) 櫻井前掲書p137。2007年、西津軽郡鱒ヶ沢町種里集落にて筆者聞き取り。同様の伝承は、鱒ヶ沢町大然集落の庄屋孫左衛門家にもあったという(坂本吉加 1988『青森県の文化シリーズ 28 津軽の伝説 2』北方新社、p211～212)。それと類似した話型で同じ大然集落の倉田にいたという天狗の話もある(臼田甚五郎監修・國學院大学説話研究会編 1967『津軽百話』小林幸男、p103)。
- (44) 2007年、西津軽郡鱒ヶ沢町種里集落にて筆者聞き取り。
- (45) 尾上町 1992『尾上町誌 通史編』同町、p958
- (46) 明治3年(1870)「神佛混交神社調帳」(加藤慶司 1995『古文書による津軽の神社縁起』p198)
- (47) 畠山前掲書p151～153
- (48) 畠山前掲書p147～151
- (49) 山田前掲書 2016 p110～112、川合勇太郎 1970『ふるさとの伝説』津軽書房、p245～248など、太刀についた鬼の指の跡の伝承については、2009年に巖鬼神社(弘前市)宮司から筆者聞き取り。
- (50) 前掲書『陸奥の伝説』p130～131・158～159。なお、岩木山麓の十腰内集落や鬼沢集落周辺は、古代に大がかりな製鉄業が行われていた地であった。付近の鱒ヶ沢町空沢遺跡等から、10世紀半ばから11世紀の製鉄関係の遺跡が複数出土している(岡田康博 2007「遺跡が語る津軽史」(『津軽学 3号』津軽に学ぶ会)。
- (51) 畠山前掲書p138～147
- (52) 工藤弘樹 2008「縁起・由緒書から探る中世津軽寺院史研究—弘前市禅林街曹洞宗寺院を中心に—」(青森県民俗の会編『青森県の民俗 第8号』同会、p119)
- (53) 畠山前掲書
- (54) ホームページ「古津軽マップ 古津軽の鬼伝説1鳥居の鬼コ」より) 青森県ホームページ中南地域連携事務所【無くなり次第配布終了】集めてまわろう!「津軽の鳥居の鬼コカード」!!<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kotsu/ch-renkei/onikocard.html> (2026年2月5日取得)。
- (55) 大湯前掲書p64～68
- (56) 「奥南新報」昭和5年(1930)5月28日付記事。なおこれは毎年行なう6月24日の厄払いの人形とは異なるという(前掲書『村の話 上』p60)。
- (57) 福土前掲書 2006 p89～98・p106～107、入江前掲書p56
- (58) 山田前掲書 2016 p110
- (59) 山田前掲書 2016 p104、山田前掲書 2014 p82
- (60) 畠山前掲書p155～157。前掲書『妖怪展』p33。前掲書川合 p54、坂本吉加 1986『青森県の文化シリーズ 25 津軽の伝説 1』北方新社、p110～113
- (61) 加藤前掲書p197
- (62) 小池淳一 2002「法霊権現信仰覚書」(大島建彦『民俗のかたちとこころ』岩田書院、p411～418・422)
- (63) 畠山篤 1997「岩木山麓の水利伝承—津軽の大人(鬼)伝承—」(弘前学院大学・短期大学地域総合文化研究所所長遠藤知恵子編集兼発行『地域総合文化研究所紀要 第9号』p28～29)、畠山前掲書p97～98、福土前掲書 2006 p84、なお鬼の歯による雨乞いについては、旧平賀町平田森集落の田の中にある歯もり、はしもり、剣もりの三つは、退治された鬼の頭や歯を砕いて埋めて塚にしたものだといひ、集落の人々が日照りが続いて雨乞いをするときには、歯もりをあばいて鬼の歯を掘り出すと必ず雨が降るといふ(前掲書森山『陸奥の伝説』p57)、櫻井前掲書p138
- (64) 前掲書「村の話」昭和4年(1929)4月19日付記事(前掲書『村の話 上』p25)

(謝辞)

写真資料掲載を御許可いただいた各位に深く感謝申し上げます。

また岩木山赤倉登山調査で登山道のガイドをしていただいた故松木健治氏にも深く感謝申し上げます。